

出題分析			
試験時間	90分	配点	150点
		大問数	4題
分量（昨年比較）	[減少 同程度 増加]	難易度変化（昨年比較）	[易化 同程度 難化]
【概評】 原始から戦後（現代史）までの全時代が満遍なく出題された。例年通りリード文や史料を生かした問題構成となっており、記述力が求められる出題となっていた。全体の論述量は合計635字で、昨年度よりも55字増加した。個別に見ると字数は長いもので70字であり、100字以上の大論述は見られなかった。第3問では北海道の歴史に関する問いが出題された。昨年度よりも論述量が増加しているが、第4問の影響で難化した昨年度と比べれば、やや易化したと言えるだろう。			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
1	古代の政治・社会・文化	Aでは富本銭と和同開珎, Bでは9・10世紀の地方政治を題材とした出題。問2. 教科書には和同開珎と富本銭の写真が掲載されているものの, デザインまで押さえている受験生は少ないだろう。問3. 難。「窯」がヒントになるか。問6. 藤原保則が疲弊した備中国に対して何を行ったか, それによって何が達成されたかを簡潔にまとめる。	標準
2	中世の経済・外交・文化	中世の貿易を題材として経済・外交などが出題された。問2(1). 漢字表記に注意。(2). 足利義政期の画僧を答えればよい。問3. 同じ尾張でも常滑は当時釉薬を用いていないが, その区別は難。問4(2). 15世紀半ばの事件で, 幕府の財政に大きな影響を与えたと考えられるものを想起する。問7. Cの4000貫文は遣明船の多い時期だが, Eの制限を受けた後のFではもうけの大きさが強調されている。これとAの天龍寺船の派遣が当時としては稀な事例であったことを考え合わせたい。	標準

設問別講評			
3	近世～現代の政治・外交・社会	近世の法律の条文を題材として、江戸時代から現代の政治・外交・社会が出題された。問1(2). エがやや細かい。問1(3). かまどや囲炉裏などを想起し、近世社会において薪や炭が主に暖房や炊事などで利用されたことを記述したい。一方、明治時代以降にはガスや電気が使用されていった。問4(1). アイヌは場所請負制度によって和商人のもとで労務役となったことをまとめたい。問5. 難。空欄後の「民族」をヒントに解答したいが、難しい。	標準
4	近現代の政治・外交・社会（史料）	3人の人物の著作から引用した文章を題材とした出題。解答に思考を要する論述問題が複数見られたため、解答に苦労しただろう。問1. 尚泰を琉球「藩」王としたことから、前年（1871年）の廃藩置県を想起する。問2(2). やや難。東京開市が1869年であることから遷都を想起し、問題文にある「外国人居留地」の記述も合わせて政治的意図を推測したい。問5. 難。この両者の違いを意識していた受験生はほとんどいないだろう。問7. 日韓基本条約の内容を押さえていることがポイント。「見解の相違」とあるので、野党（日本社会党など）は与党（自由民主党）と対立する見解を持っていたと考えて記述したい。	やや難

合格のための学習法

北海道大学の日本史は、短答記述問題と論述問題が組み合わされて出題される。短答記述問題は、教科書の重要語句レベルのものが大半であるので、基礎事項をしっかりと身につけることが重要である。論述問題については、常日頃から北海道大学のほか、他大学などの過去問を実際に解いてみて添削指導を受けるのが高得点への最良の方法である。それとともに教科書に書かれていることなどを学校や予備校の先生に積極的に質問し、意欲的な学習をする態度が必要だろう。単純な暗記だけでなく、深く知る、あるいは理解する姿勢が大切である。